ハーレムスローライフ

Harem Slow Life

小説 竹内けん
挿絵 大蕗

試し読み版

2DB
二次元ドリーム文庫

第一章　年季の終了　006
第二章　田舎暮らし　047
第三章　シスター　085
第四章　二股　120
第五章　男の責任　155
第六章　幸せのカタチ　200

登場人物紹介

アンジュ

ヤーシュ村で子供たちに読み書きを教えている心優しいシスター。

チェルシー

ヤーシュ村の役人。地方豪族の娘だが明るく親しみやすい女性。

ノーラ

ボロクルが戦争中に助けた孤児。彼に引き取られ養子となる。

ボロクル

ドモス王国の元軍人。第二の人生としてヤーシュ村でスローライフを送ることに。

第一章　年季の終了

「ん、んんん――!!!　娑婆の空気は美味いなぁ」

仙樹暦１０３６年の暮れ。

王国ドモスの首都フェンリル。その郊外にある兵舎から出たボロクルは、両手を大きく広げて、胸いっぱいに空気を吸った。

軍服を脱ぐ前と後で空気の味が変わる、というものではないのだろうが、気分は味に影響を与えるものだ。

十四歳のときに徴兵されて軍隊に入り、今年三十歳となってお役御免となった。実に十六年間ぶりに民間人となれたのだ。

身も心も軽くなったボロクルは、改めて町並を見渡して感嘆する。

「フェンリルも都会になったものだ……」

ボロクルが軍隊に入るまで、ドモス王国は辺境の一国家に過ぎなかった。当然、その首都もそれなり、いや、まるで草原の海原の中に、ぽつりと頭を出した岩礁のような存在だった。

それも隔世の感だ。いまや世界最強の王国の首都である。様々な人々が往来しており、

とんでもない賑わいだ。

ボロクルが徴兵された仙樹暦１０２０年。ドモス国王ロレントは二十歳で即位した。

いや、武力による世界征服を標榜する覇王が即位したから、大々的な徴兵がなされ、それにボロクルも引っかかったのだ。

そこから始まったドモス王国の快進撃は、世の人々を驚かせた。

セレスト王国、シュルビー王国、クラナリア王国、エクスター王国、ヴィーヴル王国、ナウシアカ王国、クロチルダ王国、ネフティス王国、バザン王国、インフェルミナ王国、メリシャント王国と征服してしまったのだ。

ドモス国王ロレント直属の八千人の軍隊は、最強の名をほしいままにした。

その末席にあったボロクルも、否応なく各地を旅して回った。歩いた距離だけで、世界を一周できるのではないかと思えるほどだ。

とはいえ、いかに精強（せいきょう）な軍隊といえども、個々の兵士がすべて一騎当千というわけではない。

十六年間も兵役にありながら、ボロクルはついに際立った手柄をあげることはなかった。

同僚の中には偉くなった者も大勢いたが、ボロクルは何者にもなれず退官の運びとなったのだ。

別に出世をしたくて死に物狂いで働いた、ということはなく、無難に兵役を終えて退官

しようと思っていたのだから、予定通りの結末である。
とはいえ、まさかこんなに長い期間を兵役に取られるとは予想していなかった。
徴兵された当初はせいぜい二年ぐらいのものだろう、と考えていたものだ。それが戦いに続く戦いで退官の時期は伸びに伸びて、実に十六年間も拘束された。
十四歳から三十歳。青春の光輝をすべて兵役に、そして野心家の国王に捧げたのである。
無敵の快進撃を続けたドモス軍であったが、先日、メリシャント地方を巡る攻防で、南の大国オルシーニ・サブリナ二重王国との戦いで一敗地に塗れた。
ドモス王国およびに国王ロレントは、雪辱を期してこれからも戦い続けるのだろうが、ボロクルはもう十分に義理を果たしたと思う。
これからは好きに生きさせてもらおうと決意して、退官を申し入れたのである。
「長い間お疲れさまでした」
去り行く兵士に対する恒例行事なのだろう。事務官は深々と頭を下げてボロクルを送り出してくれた。
誠意は込められているのだろうが、おそらく日に何度も同じことをしているのだろうと考えると、空疎なものを感じてしまう。
（さて、これからどうするかな？）
軍隊をやめたい、とずっと思っていた。しかし、やめて、なにかやりたい仕事があった

わけではない。とにかく軍隊をやめたかった、というのが切実なる理由だった。

毎日毎日来る日も来る日も、人を殺すこと、殺されることを考える生活というのは、人間の生きようとして間違っている、と思ったのだ。

正直、生きてこの日を迎えるとは思っていなかった。夢を見ているような気分である。

頭上から振り注ぐ太陽の光が、ひたすらに眩しい。人々の往来が紙芝居のように感じられた。

なにをするかよりも、とりあえず、どこに向かって足を踏み出そうかと逡巡(しゅんじゅん)しているところに、ツカツカと女が歩み寄ってくる。

自分にも待っていてくれた女の一人もいたのか、と一瞬、勘違いしそうになったが、残念ながら見知らぬ顔だ。

彼女はボロクルのまえに立つと、右手を顔の横に掲げてヒラヒラさせながら笑った。

「こんにちは。お勤めご苦労さまで～す」

軽いノリの女だ。

年のころは二十代の後半といったところだろうか。

ミルクティーのような髪をショートカットにし、瞳は明るい茶色。背は女にしては高いほうだろうが、肉付きは薄い。より正確には胸の膨らみは残念だ。年齢を考えると、これ以上の成長は望めないに違いない。

とはいえ、顔の造形は悪くないから、スレンダー美人と称していいだろう。絶世とはつかないまでも、十分に綺麗なお姉さんだ。
「第二の人生に、田舎でまったりスローライフはいかがでしょう？」
「ん？」
思わぬ提案に、ボロクルは相手の顔をまじまじと見てしまった。
茶色のベストに赤いネクタイ、膝丈のミニスカートという装いは、おそらく制服だ。どこの制服かはわからない。軍服ではなさそうだ。軍服ならばボロクルの知識に引っかかったことだろう。
腰の後ろにはショートソードを吊るしているが、これは護身用としてだれもが持つ程度のものだ。
訓練は受けているだろうが、見るからに凄腕という雰囲気はない。
値踏みするボロクルに対して、女は両手の五指の先を胸のまえで合わせて、ニッコリと魅力的に笑う。
「いまならなんと、家と畑を無償で提供させていただいております」
「は？」
無償という提案に反応してしまったのは、凡人の悲しさといったところだろうか。思わずボロクルは聞き返してしまった。

その反応に勇気を得たのか、謎の制服の女は勢い込む。
「興味ありますよね。もちろん、ありますよね。こんな美味しい話、そうそうありませんよ。まぁ、まぁ、立ち話もなんですし、あちらの喫茶店でお茶でも飲みながら詳しいお話をさせてください」
ボロクルの左腕を取った女は、有無を言わさずにグイグイ引っ張って歩きだす。
「お、おい」
女の強引さに戸惑いながらも、ボロクルは喫茶店に連れ込まれてしまった。
これで男と女が逆であったなら、強引なナンパということになっただろう。振り払おうと思えば振り払えたのだが、美人の誘いを断れないのは、三十路の独身男の悲しさかもしれない。
（これは美人局ってやつか？）
椅子に座ったボロクルは、向かいの席に座った女の顔をまじまじと見る。
ボロクルの視線を受けた女は、ニコリと美しい笑みを返す。
毎日、鏡に向かって一生懸命に練習したのではないか、と思える完璧な笑顔だ。これぞ営業スマイル。
下手に美人顔でフレンドリーなために、どこか詐欺師めいた雰囲気となってしまっている。

（はぁ～、俺って女に弱かったんだな。そうだよな。軍隊にも女はいたが、基本、男勝りのゴリラみたいな性格のやつばかりだもんなぁ）

女に対する免疫のなさは自覚している。余計な厄介ごとに巻き込まれそうだ、と内心で溜息をつく。

「さて、勇者さま」

妙な呼称に、ボロクルは眉を顰（ひそ）める。

「ちょっと待て。なんだ、そりゃ」

「ボロクルさまは、御国のために十六年間も戦い続けられた歴戦の勇者さまと伺っております」

「なんで俺の名前を知っている？」

ますます苦い表情をするボロクルに、女は悪びれずに応じる。

「兵舎の方にお聞きしたら、教えてくれました」

「……。なるほど」

門番のやつ、この女の色香にはまって、ペラペラと話したようだ。

ドモス軍の機密保持の甘さが不安になってきた。それともこの女の交渉力がすごすぎるのか。

おそらく両方だろう。

「とにかくそういう恥ずかしい呼称はやめろ。第一俺は、長く軍隊にいたというだけで、大した武功もあげてない下っ端だ」
「陛下の直属軍で十六年も戦ってこられたのですから、勇者という呼称に十分に価すると思いますが、では、なんとお呼びすればよろしいですか？」
女のヨイショは聞き流し、ボロクルは不機嫌そうに応じる。
「ボロクルだ」
「では、ボロクルさま」
「さまも不要だ」
吐き捨てたボロクルは、改めて調子のいい女の顔を見た。
「それでおまえは何者だ？」
ボロクルにうさん臭そうな視線で睨まれた女は、慌てて懐から名刺を取り出した。
「あ、これは申し遅れました。わたくし、セレスト地方にある村ヤーシュの役人でチェルシーと申します」
セレスト地方は、ドモス国王ロレントの大親征が始まると、真っ先に攻め滅ぼされたセレスト王国があった地域をいう。
「役人か？」
「はい。地方の小役人で～す」

反射的に名刺を眺めながら呟くボロクルに、チェルシーと名乗った女は、明るく卑下してみせる。
ヤーシュ村とやらは初めて耳にしたが、なんとかセレスト地方の知識を脳裏から引っ張り出す。
「セレスト地方といえば、隻腕将軍ヴァティストゥータの出身地だな。勇将であられたが、残念なことをした」
セレスト王国の将軍であったヴァティストゥータは、ドモス国王ロレントと一騎打ちをして片腕を切り落とされて降伏。その後は有力な将帥として、ドモス軍を支えた。しかし、先日のメリシャントの首都クィンクエの戦いにて戦死している。
向かいの女が反応に困るといった顔をしているのを見て、我に返ったボロクルは首を横に振るう。
どうも、軍隊の垢が取れていないらしい。一般人にとっては将軍の生死など遠い国の出来事であろう。もっと世間受けする知識を披露する。
「鉱物資源が豊富なことで有名な地域だな。それを加工する技術にも秀でているとか。たしか陛下がアンサンドラ妃殿下とご成婚なされたときに贈られた宝冠を作ったのはセレスト地方の職人だと聞いた」
「はいはい。そのセレストです。ですが、セレスト地方も広いのですよ。すべてが鉱山と

いうわけではなく、わがヤーシュ村には鉱山はありません。よって小物細工などはやっておりません。わが村は農業を特産としております」

いくら鉱物資源で有名だといっても、一産業だけで成り立っているはずがない。職人たちだって食事はする。

「わが村では蕎麦が取れます。また、メロンも絶品です。なんとあのロレント陛下の第二王女ドラグリア殿下も食されたことがあるとかないとか噂されたこともあるほどです」

確信のない情報らしい。

とはいえ、王女ドラグリアの母親は、たしかセレスト王国の姫君だったから、地元の名産品を食べたことがあっても不思議ではない。

必死に郷土愛をアピールする女を、ボロクルは微笑ましく見る。

「つまり、畑で作れるのは蕎麦とメロンといったところか」

「蕎麦がき美味しいですよ。お嫌いですか？」

「いや、好きでも嫌いでもないな」

この十六年も、軍隊にあって戦いに戦いまくってきたのだ。食糧事情がいつもよかったわけではない。

何日もまともな食事を取れなかったこともあるし、とてもではないがこのお嬢さんに告白することはできない物も食べた。

好き嫌いなど許されない世界に生きてきたのだ。
「人間大地に足をつけて生きるのが一番です。国家や体制がいかに変わろうと、農民ならば食っていけます。緑豊かな土地で、晴耕雨読の生活ですよ。理想の生活ではありませんか？」
ドモス王国というのは、放牧が中心な地方である。馬と飛龍が特産品だ。
この二つがあったから、ドモスは世界を席巻する強い軍隊を作れた。
ボロクルの父親も馬飼いである。つまり、ボロクルにとって農耕とはまったく縁のない存在だ。
しかし、それだけに少し興味をひかれた。
（農家か、考えたこともなかったが、やってみたら、意外と面白いかもな）
特に目的もなかったボロクルである。そこに指し示された新しい道が輝いて見えた。
「最初におまえ、不思議なことを言っていたな。家と畑をただでくれるのか？」
無償という響きに反応してしまったのは、我ながら浅ましいと思ったが、ボロクルは再確認を求める。
「ええ、ええ、ええ、そうですよ。ボロクルさんは興味がおありですか？」
「いや……」
たしかに興味がないわけではない。

十四歳で徴兵されてからいままで、十六年兵士をしていたのだ。
ドモス王国といえども、鬼ではない。退官する兵士にそれなりの慰労金を支給してくれた。贅沢をしなければ、それなりに食っていける。
とはいえ、宿暮らしなどしていたら、あっという間に溶けてしまうだろう。定住地は必要だ。
まずは住むところを探さねばな、と考えていたところにこの誘いである。渡りに船だったのだ。
「しかし、なんで家と畑がタダなんだ？」
タダより高い物はないとか、美味い話には裏があるとか、その程度の警句は知っている。
それを受けてチェルシーは悲しそうに眉を顰めた。
「実はわが村は現在、過疎化が進んで困っているんです」
「過疎？」
ドモス王国の首都フェンリルの賑わいに驚いていたボロクルは、そんなことを考えたこともなく意表を突かれた。
チェルシーは勢い込んで語る。
「陛下が若くて活きのいい者を、軍隊にどんどん取ってしまいます。おかげで耕す者のいない畑と、住む人のない家は売るほど、いや、タダで配るほどあるんです。なら、いっそ

配ってしまえ、ということで、退役軍人の方に目をつけたというわけです」
「なるほど……」
なんとなく村の事情がわかったボロクルは、熱くなっている女を片手で制した。
「すぐに住めるというのなら、行く」
「おお」
ボロクルの即決に、勧誘員の女は驚きの声をあげた。
「本当にいいんですか？」
自分で考えた作戦だろうに、うまくいくとは思っていなかったのか、チェルシーは目を見張る。
「なんだ。受けたら悪いのか」
「いや、そうではなくて。陛下の軍団にあって十六年間も戦った勇者とあらば、どこの商家でも高禄の傭兵として雇ってくれるから、と断られるかも、と思っていましたもので」
それは考えなかった、と内心で思ったボロクルだが、表面上はニヒルに笑って応じる。
「ふっ、十六年間も、上の顔色を窺う生活をしてきたからな。新たな上役を持つつもりはないよ。土地さえあれば、人間は食っていける。最悪、蕎麦とメロンは食える場所なんだろ」
別にこちらから一銭も払う話でもない。もし、行ってみてとても農家としてやっていけ

ないとわかったのなら、すぐに立ち去ればいいだけのことだ。
「はいはい。そうですそうです。では、こちらが契約書になります。ご熟読ください」
差し出された書類を、ボロクルはざっと読む。軍隊にいたおかげで、最低限の読み書きは教えられた。
自分にとってデメリットはなにもないようだ。契約書にサインをしたボロクルは立ち上がる。
「では、セレスト地方のヤーシュ村だったな」
「いやいやお待ちください。案内しますよ。わが村自慢の公用車です。しかし、そのまえにここのケーキを食べていきましょうよ。あたしはフェンリルに来て、この店でケーキを食べるのが長年の夢だったんです」
拝み倒さんばかりのチェルシーの懇願を受けたボロクルは、椅子に座り直した。
運ばれてきたケーキを、フォークですくって口に運んだチェルシーは実に幸せそうな顔になる。
「くー、やっぱり美味しい。あたしはヤーシュ村に骨を埋める覚悟なんですけど、こういう小洒落た店の美味しいケーキはありませんからね～」
公務のついでに、私的な欲望を満たしている女役人を見やって、ボロクルは肩をすくめる。

第一章　年季の終了

チェルシーは明るくノーラに手を振って、出ていった。
「さてと、とりあえず、掃除かな。ノーラ、手伝え」
「うん」
義理の親子は、初めての共同作業として、家の掃除を行う。
その最中に、隣の農家のお婆さんがやってきて、蕎麦がきを分けてくれた。
「ありがとうございます。よし、今日の作業はここまでだな。飯にするかって、このまま食うのは問題か、先に風呂にしよう」
ボロクルも、ノーラも埃塗れである。
急いで風呂に入りたいということで、湯舟に井戸水を張ると、魔法宝珠をかざした。
たちまち湯が沸き、湯気が立ち上る。
「おお、すごい」
魔法を初めて見たのか、ノーラは目を丸くした。
とはいえ、適温には調整できないので、最後の仕上げとしてボロクルは右腕をまくって湯をかき混ぜる。
「まぁ、魔法を使うってのは贅沢なんだがな。ほれ、とっとと入って綺麗になっちまえ」
「で、でも」
「なに恥ずかしがっているんだ」

嫌がるノーラの服を脱がせて、湯舟に放り込む。
胸はツルペタだし、下の毛も生えていないような存在は、ボロクルの認識では女ではない。
ボロクルも服を脱ぎ、一緒に湯に浸かる。
「はぁ～、まぁ、悪いところではないよな」
ボロクルは湯舟のヘリに両腕を預けて、天井を見た。
ノーラは顔を真っ赤にして、湯舟のヘリを掴まえている。
逃げようとするノーラのツインテールの頭の真ん中を右手で押さえた。
「せめて三十秒は入れ。ほれ、数字は数えられるのか？」
「むー、子供扱いして」
「子供だろ」
ボロクルの決めつけに、ノーラは不満そうな顔をした。しかし、自分の能力を誇示しようとしたのか、澄ました顔で、素直に数字を諳んじ始めた。
それを聞きながらボロクルは感慨にふける。
（まさか、俺が農家になるとはね。昨日までは考えもしなかった。それもこんなガキと一緒に暮らすことになるとは……）
風呂から上がると、二人はお愉しみの蕎麦がきをいただくことにする。

囲炉裏に鍋をかけ、湯を沸かす。そこにもらった蕎麦がきを放り込んで温めてから、小皿に取り醤油で食べる。

「お、なかなか美味いな」

「うん、はふ、はふ、うん……」

体を動かしたあとだけに、なにを食べても美味いのだろう。ノーラも夢中になって蕎麦がきを頬張っていた。

そんな様子を見ていると、ついつい微笑を誘われる。

(ふっ、猫でも飼った気分だな)

軍隊にいたときは、大勢の仲間と飯を食うのが当たり前だった。それが独りで食べるとなったら、寂しいことになっただろう。

ノーラがいてくれただけで心が安らぐのを感じる。

(こいつが嫁に行くまでは世話をしてやろう)

と決意を新たにするボロクルであった。

食事のあとにボロクルが洗い物をしていると、健気にもノーラが手伝ってくる。

夜は同じ布団で寝た。使える寝台が一つしかなかったからだ。

破瓜のとき女は痛がるものらしい、という程度の豆知識は心得ている。その対処方法は、よく愛撫をして、たくさん濡らすというものしかないであろう。
「うん、うん、うん……」
いろいろと舐めまわした結果、チェルシーは勃起した陰核を舐められているときが、一番反応がいい。それと見て取ったボロクルは、包皮から頭を出した陰核を中心に舌先でこね回してやった。
「く――――!!!」
股を開いたまま、チェルシーは腰を大きく上げてのけぞった。
（どうにかイったな）
一仕事を終えて安堵したボロクルは、ついでズボンの中から逸物を取り出す。
それを見上げたチェルシーは、軽く口元に手を当てながら感嘆の声をあげる。
「さ、さすがボロクルさん、大きいですね」
「ん？　普通だと思うけどな」
別に他人と比べたわけではないが、特別大きいなどという自惚れを持ったことのないボロクルは苦笑混じりに応じる。
「いやいや、昔、弟のを見たことあるんだけど、もう豆粒みたいに小さかった」
「そりゃ、姉ちゃんのまえで大きくしている男はそういないだろ」

苦笑したボロクルは、いきり立つ逸物を、濡れそぼった肉裂へと添える。
その光景を見下ろしながら、チェルシーは頬を引きつらせた。
「あはは、自分から誘っておいてなんだけど……。こういうことはやっぱり、結婚前の女はやめておいたほうがいいかな、なんちゃって」
「いまさら遅いな」
「あはは、そ、そうですよね～。あたしもようやく大人の女になる日が……来たということで。よ、よろしくお願いします」
頬を引きつらせながら、チェルシーは乾いた笑い声を出す。
初めての体験なのだ。緊張するのも当然だろう。ボロクルのほうとて、処女を相手にするのは初めてだったので、いささか緊張する。
（まぁ、十分に舐めたし、これだけ濡れていれば大丈夫だろ）
相手は子供ではない。処女とはいえ、二十代後半のれっきとした成人女性である。男を迎え入れる器として完成しているだろう。
覚悟を決めたボロクルは、シーツに両膝をつくとゆっくりと腰を進めた。
亀頭部が半分ほど埋まったところで、すぐに行き止まりとなる。
「くっ」
チェルシーは苦しげに呻いた。

どうやら、処女膜を捉えたようだ。
（硬いな……）
いわゆる処女膜硬化を起こしているのかもしれない。処女膜というやつは年を経るごとに硬くなっていき、破瓜のときの痛みも激しくなるものという豆知識をどこかで聞いたことがある。
（仕方ないな）
心を鬼にしたボロクルは、腰に体重を乗せて力任せに押し込む。
「ひぃぃぃぃ!!!」
ブツン！
断末魔に似たチェルシーの悲鳴とともに、たしかな手ごたえをもって肉門を打ち破った。
そして、入口さえ突破してしまえば、ズブズブズブズブと狭い隧道を押し広げながら進んでいく。そして、ドスンと最深部にまで届いた。
「い、痛いぃぃぃ」
必死に逃れようとしたチェルシーの肩を、ボロクルは押さえつける。
「我慢しろ。処女を捨てたかったんだろ」
「で、でも……」
異物を粉砕しようとするかのように膣洞がギュッと逸物を締めてくる。

（きついな。しかし、悪くはない）

久しぶりの女の味である。意識していなかったが、体が女を欲していたのかもしれない。

体の内からあふれでる肉欲に支配されたボロクルは、破瓜の痛みに涙している女を押さえつけて、リズミカルに腰を叩きつける。

「あっ、あっ、あっ、あっ」

頬を涙で濡らしたチェルシーは、喘ぎ声を抑えるのを忘れている。ボロクルはそれを咎めなかった。自らの昂りを止められなかったからだ。

太い逸物が、荒々しく女の腸をかき混ぜる。

（こいつは自分を田舎の女だって卑下しているが、別に都会の女より落ちるってものではないな）

ボロクルは、ノーラの親代わりをする覚悟だが、結婚をしないつもりはない。その相手が、この女でもまったく不足はなかった。

（この女が欲しい）

と切実に思った。睾丸から駆けあがってきた昂りが、女の最深部に向かって解き放たれたいと滾っている。

それを気合で抑えながら、本人に確認を取った。

「チェルシー、このまま出していいか？」

「うん、いい、いいよ。ノーラちゃんに弟や妹をいっぱい作ってあげよう」
「よし」
本人の許可をもらったボロクルは、欲望のままに腰を振るい、そして、女の最深部に向かって欲望を吐き出した。
ドビュッ！　ドビュッ！　ドビュッ!!!
「あ、入ってくる。すごい、いっぱい、入ってくる。あ、あったかいよぉぉぉ」
破瓜の痛みもあって、絶頂はできなかっただろうが、膣内射精されるのは女の幸せなのだろう。チェルシーはトロンとした表情をしている。
思う存分に射精したボロクルは萎えた逸物を引き抜き、胡坐(あぐら)をかいた。その膝の上に頬を乗せてきたチェルシーはうっとりと呟く。
「あは、種付けされちゃった……」
「一発で妊娠する、というものでもないだろうがな」
ボロクルは右手で、チェルシーの頭髪を撫でてやる。
「うん、妊娠するまえに、女の喜びってやつをたっぷり教えてほしいな」
「ふっ、スケベな女だ」
ボロクルの言葉に、チェルシーは頬を膨らませる。
「ふん、どうせあたしはスケベな女ですよ～だ。あ、それからノーラちゃんのお母さん代

たまらなくなったボロクルが吼える。
「なら、そろそろ入れさせろ」
ボロクルの率直な要望に、欲情しきっていた女たちは艶やかに笑う。
「もっとたっぷりとご奉仕してあげようと思ったのに。旦那様は我慢がきかないなぁ」
「仕方ないだろ。おまえらのオ○ンコが気持ちいいことはすでにわかっているんだから」
ボロクルの答えに、チェルシーは肩をすくめる。
「はいはい」
「アンジュさん、どちらが先に入れようか？」
「そうですね」
白い内腿をこすり合わせながら、アンジュは軽く小首を傾げる。
「ここはやはり年長者からでしょうか」
「いやいや、年少者からでしょ」
どうやら、二人とも相手を気遣って遠慮しているようである。
それと察したボロクルは、二人の股の間に手を入れて股間を鷲掴みにした。
「あん♪」
女たちの甘い悲鳴を聞きながら、ボロクルは宣言する。
「安心しろ。今夜は一発や二発で終わらせるつもりはないからな。二人とも腰が抜けるま

で交互にやってやるさ」
「キャッ、旦那様のエッチ」
チェルシーはわざとらしい嬌声をあげる。
「こ、腰が抜けるまでだなんて、そんな……楽しみです」
片手で黄金の頭髪を掻き上げたアンジュは恥じらうふりをして、上体を左右にねじった。
「だから、そうだな。最初はアンジュが入れろ。チェルシーは俺の顔に跨がれ」
「は～い」
「わ、わたくしから入れるのですか？」
アンジュはいささか驚いた顔をした。
ボロクルにいろいろ仕込まれて、それなりにエッチな女に成長しているとはいえ、アンジュは基本的に受け身の女である。自分から男の上に乗ったことがなかったのだ。
その点、チェルシーは欲望に正直であり、やりたいときには自分から騎乗位でガンガン腰を振ってくることも珍しくない。
そういう意味で、アンジュに騎乗位をさせてみたかった。
「ああ、たまには自分で思いっきり腰を振ってみな」
「わ、わかりました。頑張ります」
真剣な表情で頷いたアンジュはいそいそと、ボロクルの腰の上に跨がり、いきり立つ逸

物を右手に取って、左手で黄金の濃い陰毛を掻き分けると自らの濡れそぼった膣に添えた。
「それではお先に失礼して、い、いきます」
同輩に軽く挨拶をしたアンジュは、気合の声とともに腰を落とした。
ズボリ
いっきに子宮口まで届いた。
「あん、大きい。わたくしのお腹の中がいっぱいに広がるこの感じ……。すっごく気持ちいいです。これがわたくしの旦那様のおちんぽさま」
ざらざらぶつぶつの膣壁が、きゅっと肉棒を包み込む。
(くっ、相変わらずいいオ○ンコをしている)
定期的に犯しているとはいえ、飽きるということはまったくない。ボロクルは必死に丹田に力を入れて、射精欲求に耐える。
「そのまま両腕を頭上にあげて、腰を前後に振るってみな」
「あ、はい」
素直に両腕を頭上にあげて握りしめたアンジュは、腋の下をさらしたまま、リズミカルに腰を前後に使い始めた。
「あん、あん、あん」
大きな乳房がプルンプルンと触れる。

これぞ巨乳女と騎乗位をする醍醐味の一つであろう。ザラザラの膣内で逸物を翻弄(ほんろう)されるのはもちろん気持ちいいが、それ以上に女が恥じらいの表情を浮かべながら、大きな乳房を揺らす姿は、見るものを幻惑する。

「うわ、エロ……」

傍らで見ていたチェルシーもまた、感嘆の声を漏らす。

「は、恥ずかしい。そんなに見ないでください」

「いやいや、これは見るでしょ。村のアイドルである清純派シスターさまが、男の上に跨がって巨乳を揺らしながら腰を振っているとか、エロすぎてご飯何杯でもいけそう」

「ああ、そんなこと言われましても……ああん」

恥じ入りながらも、アンジュは腰の動きを止めようとはしない。心よりも体のほうが、欲望に正直なようである。

その艶姿を指を咥えて見いるチェルシーを、ボロクルが促す。

「おまえはこっち」

「はいはい」

アンジュに比べると、性的に発展的なチェルシーは気楽に、ボロクルの顔を跨ぐ。

しかし、腰を下ろす寸前で、ぶるっと震えて止まった。

「うわ、男の顔に跨がるのって、意外と恥ずかしいわ」

クンニは当たり前のように何度もやってきたが、顔面騎乗は初めてかもしれない。いや、男が女に無理やり、座らせようとしているのだから、石清水というのだろう。
「いいから早く座れ、おまえのオ○ンコを舐めたいんだよ」
「もう、スケベ」
口を尖らせながらも、チェルシーは腰を下ろした。
ボロクルの鼻の頭はもちろん、口に至るまで濡れた媚粘膜によってすっぽりと塞がれる。
ペロリ
「ふあん♪」
チェルシーはのけぞって歓喜の悲鳴をあげる。彼女の陰毛は薄いのでクンニをするには最適だ。
ピチャピチャピチャ……
ボロクルの舌は丁寧に、村のお巡りさんの体内をかき混ぜる。
「ああん、おちんちんをぶち込まれるのもいいけど、舐められるのもいいわ。もうあたしの気持ちいいところ、あたし以上にボロクルのほうが知っているんだもん」
アンジュは騎乗位。チェルシーは顔面騎乗で、互いに向かい合った形だ。
二人はそれぞれ快感を貪っていたが、不意にアンジュが悲鳴をあげた。
「あん、やめてください。そんな、女同士で」

「いやいやいや、せっかく同じ男の妻になるんだよ。女同士でも楽しまないと損でしょ」
どうやら、チェルシーがアンジュの裸体に悪戯を始めたようだ。
（ったく、仕方ないな）
とは思うが、愛する妻たちには仲良くしてもらいたいから放置する。
「うわ、手に取ってみるとこのおっぱいはほんとすごいわ。女のあたしでも、いつまでも触っていたくなる」
「あ、そんな先端は、先端はダメです。ああん」
「女の体は女が一番よく知っているっていうでしょ。ボロクル以上に気持ちよくしてあげるよ、にひひ♪」
悪乗りしたチェルシーが、一方的にアンジュの乳房を悪戯していたようだが、唐突に流れが変わった。
「わたくしだって、女なのですから、女の責め方はわかります。ここでしょ、この硬くなっているところがよろしいのでしょ、ねぇ、チェルシーさん♪」
「ああん、先端をクリクリされたら、ひぃぃぃ」
残念ながら、チェルシーの尻が邪魔で、上空で繰り広げられる女たちの淫らな戦いの様子を、ボロクルは見ることができない。
しかし、降り注がれる女たちの甘い声が、否応なく男を高ぶらせた。

チェルシーの小尻を両手で掴み、膣孔に舌を押し込んで、中をすべて舐めまわすように舌を動かしつつ、腰をガンガンと突き上げてアンジュの子宮口をノックする。
「あん、あん、あん」
「ちゅ、ちゅごい、ちゅごい、ちゅごいの」
女たちの甘い悲鳴が、否応なくボロクルを追い詰める。
「ああ、おちんぽさまがビクンビクンいっています。ああ」
すでに何度も膣内射精をされており、その気持ちよさを身をもって知ってしまっているアンジュが、牝の声を張り上げるとともに、ザラザラの膣洞がキュッキュッと締めてきた。
一緒に絶頂しようと、体が準備しているようだ。
「いくぞ」
「はい、いっぱい、いっぱい子種をください。ああ、来ましたぁ――――!!!」
ドビュー！　ドクンッ！　ドクンッ！　ドクン！
「ああ、熱い、熱い、熱い、気持ちいいですぅぅぅぅぅ」
膣内射精をされると、一緒に絶頂してしまう。もうその癖がついてしまっているらしいアンジュは気持ちよさそうに絶叫している。
その光景をチェルシーは感心した顔で見る。
「うわ、女のイキ顔、初めて見ちゃった。これはエロいわ」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/